

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 英語の中間構文の意味統語的な特徴と統語構造について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2020-03-19 キーワード (Ja): 中間動詞, 非対格動詞, 動作主, 中間構文, 受動文 キーワード (En): 作成者: 大庭, 幸男 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	<a href="https://doi.org/10.18956/00007906">https://doi.org/10.18956/00007906</a>

## 英語の中間構文の意味統語的な特徴と統語構造について

大庭 幸男

### 要旨

英語の動詞は他動詞と自動詞に分類され、さらに自動詞は非能格動詞と非対格動詞に分類される。自動詞にはこれらの非能格動詞と非対格動詞の他に、中間動詞がある。本論文は中間動詞を伴う文（中間構文）の意味的な特徴と統語的な特徴を明らかにし、それに基づいてその構文の統語構造を提案することを目的とする。まず、自動詞の種類と特性を考察し、中間動詞の特徴を明らかにする。その後、中間構文と非対格動詞を伴う文（非対格動詞文）を比較しながら、中間構文の意味的な特徴と統語的な特徴を明らかにする。その結果、中間構文は他動詞文と同様に動作主が意味的にも統語的にも存在する、と主張する。そして、その主張に基づいて、生成文法理論のミニマリスト・プログラムの枠組みで中間構文の構造を提案する。

キーワード：中間動詞、非対格動詞、動作主、中間構文、受動文

### 1. はじめに

英語の動詞には、本来他動詞ながら自動詞として用いられるものがある。例えば、open や break のような動詞を考えると、これらは(1)のように他動詞として用いられるとともに、(2)のように自動詞としても用いられる。なお、(2)のような自動詞は非対格動詞と呼ばれる。

(1) a. John opened the door.

b. Mary broke the vase.

(2) a. The door opened.

b. The vase broke.

しかし、自動詞にはこれ以外に bribe や read のような中間動詞というものがある。これらの動詞は(3)のように他動詞として用いられるだけでなく、(4)のように自動詞としても用いられる。

(3) a. They bribed bureaucrats.

b. Bill read the book yesterday.

(4) a. Bureaucrats bribe easily.

b. The book reads easily.

(2)の非対格動詞と(4)の中間動詞はともに自動詞であるが、この2つは意味的にも統語的にも異なる。これについては3節と4節で議論する。

本論文は中間構文の意味統語的な特徴を明らかにし、それに基づいて統語構造を提案することを目的とする。本論文の構成は次の通りである。2節では自動詞の種類を考察し、その過程で中間動詞の特徴を明らかにする。3節と4節では非対格動詞を伴う文（これを非対格動詞文と呼ぶ）と比較しながら、中間構文の意味的な特徴と統語的な特徴を明らかにする。5節では中間構文の構造を提案する。そのために、5.1節では他動詞を伴う文（これを他動詞文と呼ぶ）、受動文、非対格動詞文を比較・検討しながら、中間構文の動作主の特徴を明らかにする。次に5.2節では、中間構文の動作主と出来事性について考察する。そして5.3節では、5.1節と5.2節の結論を踏まえて、中間構文の構造を提案する。6節は結びとする。

## 2. 中間動詞の特徴

周知のように、動詞は他動詞と自動詞に分類できる。他動詞文は(5)のように目的語をとり、また一般的に、(6)のようにその目的語を主語にして受動文にすることができる。<sup>1)</sup>

- (5) a. Mary sent the book to him.  
b. John loaded the hay onto the wagon.  
(6) a. The book was sent to him by Mary.  
b. The hay was loaded onto the wagon by John.

一方、自動詞については、(7)のように非能格動詞と非対格動詞の2つに分類できる。

- (7) a. 非能格動詞  
b. 非対格動詞

非能格動詞は smile, run などのように自分の意志で行為を行うことを表す。また、この動詞は cough, sneeze などのように意図的ではない生理現象も表す。非能格動詞の例は(8)に、また、その具体的な例は(9), (10)に示す通りである。

- (8) 非能格動詞  
a. 意図的ないし意志的行為を表す動詞  
bark, bow, cheat, crawl, cry, dance, fight, kneel, knock, laugh, meditate, mumble, play, quarrel, run, shout, ski, smile, speak, study, swim, talk, think, walk, weep, work, etc.  
b. 非意図的な生理現象を表す動詞  
breathe, cough, hiccup, sleep, sneeze, vomit, etc.  
(9) a. John smiled sweetly.  
b. He ran two miles.

(10) a. My throat hurts and I still cough.

b. I sneeze a lot.

一方、非対格動詞には (11) に示すような動詞があり、その具体例は (12) の通りである。

(11) 非対格動詞

a. 存在、出現、消滅を表す動詞

appear, arise, arrive, disappear, ensue, exist, happen, occur, result, show up, take place, turn up, vanish, etc.

b. 物を主語にとり、かつ変化を表す動詞

boil, break, burn, close, collapse, darken, decrease, die, dim, drip, drop, evaporate, explode, fall, float, freeze, grow, increase, melt, open, rot, sink, slide, tremble, wilt, etc.

c. 相を表す動詞

approach, begin, cease, continue, end, start, stop, etc.

d. 音、光、臭いなどを発生することを表す動詞

clink, crackle, glisten, glitter, jingle, shine, smell, sparkle, stink, etc.

(12) a. She finally appeared at four o'clock.

b. The ship sank yesterday.

c. The concert began with a piano solo.

d. The sun is shining brightly.

実は、英語の自動詞には、上記のような非能格動詞と非対格動詞のほかに中間動詞がある。<sup>2)</sup>

この種の動詞を伴う具体的な例は (4) や次の (13) の通りである。

(13) a. This car sells well.

b. The floor waxes easily.

中間構文の動詞は形態的には能動形である。しかし、この構文では他動詞文の目的語が主語に生じているので、その意味は受け身である。したがって、(4), (13) はそれぞれ (14), (15) のように受動文に書き換えることができる。

(14) a. Bureaucrats can be bribed easily.

b. The book can be read easily.

(15) a. This car can be sold well.

b. The floor can be waxed easily.

すわわち、中間構文は次のような特徴をもつと言える。

(16) a. 動詞の形態は能動態である。

b. 意味は受動態である。

そのために、この種の動詞は、Jespersen (1927: § 16.8) では能動受動動詞 (Activo-passive verb) と、van Oosten (1977), Fellbaum (1985) では被動者主語動詞 (Patient-subject verb) と、そして Fiengo (1980), Keyser & Roeper (1984) では中間動詞 (Middle Verb) と呼ばれている。本論文では、Fiengo (1980), Keyser & Roeper (1984) が用いている中間動詞や中間構文という呼称を採用する。

ここで、中間構文の更なる具体的な例をあげておきたい。

- (17) a. This car handles smoothly. (Fellbaum (1986: 21))  
 b. The baggage transfers efficiently. (Stroik (1992: 127))  
 c. The chickens kill easily. (Keyser and Roeper (1984: 383))  
 d. My hat blew off. (Jespersen (1927: 350))  
 e. The clothes wash with no trouble. (van Oosten (1977: 460))

この構文について注意すべきことがある。それは、中間構文の主語は動詞の表す行為によって影響を受けなければならないことである。たとえば、次のような例を見てみよう。

- (18) a. \*The answer knows easily.  
 b. \*French acquires easily. (Keyser and Roeper (1984: 383))
- (19) a. \*Advantage takes of John easily.  
 b. \*John believes to be a fool easily. (Roberts (1987: 190))

(18)の主語 the answer, French は動詞の know, acquire によって何ら影響を受けていない。同様に、(19)でも主語 advantage, John はそれぞれ動詞の take, believe によって影響を受けていない。共に非文法的である。これに対して、(17)のような中間構文の主語は動詞の行為によって影響を受けていて、すべて文法的な文である。したがって、中間構文の主語は被動作者であると言える。

### 3. 中間構文の意味的な特徴

ここで、中間構文の意味的な特徴を考えてみよう。中間構文には、次のような2つの意味的な特徴がある。まず1つは、中間構文は一般的な事実や事柄を表す総称文 (generic sentence) として解釈されることが多いことである。<sup>3)</sup> 何故なら、(20)のような中間構文は(21)のように過去の特定の出来事を表すのは困難であるからである。

- (20) a. The mayor bribes easily.  
 b. The kitchen wall paints easily.

- (21) a. ?Yesterday, the mayor bribed easily, according to the newspaper.  
b. ?At yesterday's house party, the kitchen wall painted easily.

(Keyser and Roeper (1984: 384))

これに対して、非対格動詞文は (22) のように過去の特定の出来事を表すことができる。

- (22) a. The boat sank, according to the newspaper.  
b. At yesterday's house party, the kitchen door opened.

もう1つの意味的な特徴は、中間構文の動作主についてである。(23) のような例を考えてみよう。

- (23) a. This car sells well. (=13a)  
b. The boat sank.

(23a), (23b) はそれぞれ中間構文と非対格動詞文である。これらの文では、sell, sink が他動詞として用いられた場合に目的語にあたるものが主語になっている。<sup>4)</sup> その点において、これらの文は形式上類似している。しかし、中間構文は非対格動詞文と異なり、動作主が含意されている。その理由は3つある。第1の理由は all by oneself に関する。all by oneself は「ひとりりで、独力で」という意味をもつ。したがって、この表現は動作主を含む文やそれが含意される文には生起しない。むしろ、この表現は動作主を含まない文に共起する。このことを念頭に入れて (24) を考えてみよう。

- (24) a. \*Bureaucrats bribe easily all by themselves.  
b. The boat sank all by itself.

(Keyser and Roeper (1984: 405))

(24a,b) には、構造的な動作主は存在しない。しかし、(24a) の中間構文は非文法的であるが、(24b) の非対格動詞文は文法的である。これは中間構文には動作主が含意されているが、非対格動詞文にはそれが含意されていないことを示す。

第2の理由は中間構文のパラフレーズに関する。たとえば、(25a) と (26a) のような中間構文は、それぞれ (25b) と (26b) のようにパラフレーズすることができる。

- (25) a. This car handles easily.  
b. One can handle this car easily.  
(26) a. This engine does not lift out. <sup>5)</sup>  
b. People, in general, cannot lift this engine out.

(Fellbaum (1985: 22))

(25b), (26b) には、動作主である one や people が生じている。ここから分かるように、中間構文 (25a), (26a) には動作主は構造上存在しないが、意味的に含意されている。

そして、第3の理由は手段を表す表現の生起可能性に関する。

- (27) a. Potatoes peel easily with our new knife.  
b. Hair combs better with a golden comb.  
(28) a. \*The ice defrosted with a hair-dryer.  
b. \*The machine stopped with a stick.

(Reinhart (2016: 8))

手段を表す表現は、その文に動作主がいて、ある何らかの行為を行っていることを含意する。非対格動詞文には、動作主は統語的にも意味的にも存在しない。つまり、(28)のような文にはいかなる行為も行われていない。したがって、このような文には手段を表す表現は共起しない。その結果、(28)は非文法的になる。一方中間構文には、(27)のように手段を表す表現が生起する。これは(27)には動作が行われていることを意味する。中間構文には統語的な動作主は存在しない。したがって、(27)の文法性は中間構文には動作主が含意されていることを示す。

#### 4. 中間構文の統語的特徴

次に、中間構文の統語的特徴を考えてみよう。これに関しては、次のような2つの統語的特徴があげられる。まず1つは、中間構文は(29)のように副詞句等を伴う必要があり、それを伴わない場合には(30)のように非文法的になるということである。

- (29) a. Bureaucrats bribe easily. (=4a)  
b. The kitchen wall paints easily. (=20b)  
(30) a. \*Bureaucrats bribe.  
b. \*The kitchen wall paints.

これに対して、非対格動詞文は(31)のように副詞句等を伴う必要はない。

- (31) a. The door opened. (=2a)  
b. The boat sank. (=23b)

(Keyser and Roeper (1984: 385))

ただし、法助動詞、強勢、否定要素などがある場合には、(32)のようにこれらの要素は不要である。

- (32) a. The floor might wax.  
b. Bureaucrats BRIBE.  
c. The bread DOES cut.  
d. This bread doesn't cut.

(Roberts (1987: 195))

もう1つは、中間動詞は、(33), (34)のように、命令文や進行形を伴う文には用いられないことである。<sup>6)</sup>

- (33) a. \*Bribe easily, bureaucrat! (Fagan (1988: 181))  
b. \*Wax, floor! (Keyser and Roeper (1984: 384))  
(34) a. \*Bureaucrats are bribing easily. (Fagan (1988: 181))  
b. \*The walls are painting. (Keyser and Roeper (1984: 385))

これに対して、非対格動詞は (35), (36) のように命令文や進行形の文に用いられる。

- (35) a. Sink, boat!  
b. Close, door!  
(36) a. The boat is sinking.  
b. The door is closing.

(Keyser and Roeper (1984: 384-345))

## 5. 中間構文の構造

### 5.1 他動詞文、受動文、非対格動詞文、中間構文の比較—動作主の特性に関して—

3節で指摘したように、中間構文には動作主が含意されている。本節では、この動作主の特性について様々な構文を比較しながら考えてみよう。一般に、音声をもたない統語的な範疇には、(i) to 不定詞節の主語等に現れる PRO、(ii) 受動文に含意された動作主、そして (iii) ある要素が移動して生じた痕跡などがある。本節の議論は要素の移動と直接関係がないので、(iii) の痕跡は考察の対象にはならない。

まず、(i) の空範疇 PRO を考えるために、次のような例を見てみよう。

- (37) a. They decided [PRO to sink the boat].

(37a) は to 不定詞節を伴う文である。このような to 不定詞節は他動詞 sink を含んでいるので、主語として発音されない PRO があると一般的に仮定されている。したがって、(37a) のような to 不定詞節には、音声的に発音されない主語 PRO が統語的に存在する。そして、この PRO には動作主という意味役割が与えられることになる。

次に、(ii) の受動文の含意された動作主を考えるために、次のような例を見てみよう。

- (37) b. The boat was sunk.

(37b) の名詞句には主語の the boat しかなく、これは無生物であるので動作主として機能することはない。したがって、(37b) には動作主が統語的に存在しない。しかし、この受動文には船を沈めた人（つまり動作主）が含意されている。もちろん、この動作主は by John のように明示的に示すこともある。しかし、(37b) にはそのような表現はない。したがって、このような受動文には動作主が統語的には存在しないが、意味的には含意されていると言える。

さらに、非対格動詞文を見てみよう。

- (37) c. The boat sank. ((a-c): Chomsky (1986: 118))



(37c)には、動作主が統語的に存在しないことは明白である。また、この文には意味的にも動作主が存在しない。なぜなら、(37c)には、3節で指摘したように、all by itselfが共起し、その場合「その船がひとりで沈んだ」という意味を表すからである。

最後に、中間構文を考えてみよう。

(37) d. The hedge trims easily.

(37d)のような中間構文には、3節で指摘したように、統語的には動作主は存在しないが、意味的には存在する。なぜなら、この文はall by itselfという表現が共起せず、また、It is easy [PRO to trim the hedge].のようにパラフレーズできるからである。

以上をまとめると、(38)のようになる。

(38) a. 他動詞を伴う to 不定詞節：動作主は統語的にも意味的にも存在する。

b. 受動文：動作主は統語的に存在しないが、意味的には含意されている。

c. 非対格動詞文：動作主は統語的にも意味的にも存在しない。

d. 中間構文：動作主は統語的に存在しないが、意味的には含意されている。

したがって、(38)から(39)のような予測が得られる。

(39) 各種の統語的なテストにおいて、中間構文の結果は受動文と同じである。

そこで、この予測が正しいかどうかを判断するために、Chomsky (1986)の空範疇を区別する7つのテストを見てみよう。

第1のテストは、by句を付け加えることができるかどうかに関する。

(40) a. \*I decided [PRO to sink the boat by John].

b. The boat was sunk by John.

c. \*The boat sank by John. (a-c: Chomsky (1986: 118))

byに続く名詞句は動作主を表す。この句を補うことができるのは、(40b)のような受動文のみであり、(40a)の他動詞文や(40c)の非対格動詞文にはこれを補うことはできない。したがって、(40b)より動作主が含意される文にはby句を付け加えることができると言える。もし(39)が正しいなら、中間構文でもby句を付け加えることができると予測される。そこで、(40d)のような中間構文を考えてみよう。

(40) d. \*This book sells well by John.

(40d)は予測に反して非文法的である。したがって、by句を付け加えることに関しては、中間構文は受動文よりもむしろ他動詞文と同じ振る舞いをしている。

第2のテストは、voluntarilyなどの動作主指向副詞に関する。

(41) a. I decided [PRO to leave voluntarily].

b. The boat was sunk voluntarily.

c. \*The boat sank voluntarily. (a-c: Chomsky (1986: 118))

この種の副詞は主語の動作主が自発的に行為を行うことを表す。この副詞を補うことができるのは(41a)の他動詞文と(41b)の受動文であり、(41c)のような非対格動詞文にはできない。これは動作主が統語的に、あるいは、意味的に存在する文には、この *voluntarily* という副詞が生起できることを示している。これを踏まえて、中間構文を見てみよう。

(41) d. \*This book sells well voluntarily.

(38d) で見たように、中間構文には動作主が意味的に含意されている。これは受動文と同じである。したがって、(39) より、この2つはテストにおいて同じ結果が得られるだろうと予測できる。しかしながら、予測に反して中間構文には *voluntarily* は生起できない。

第3のテストは、空範疇のコントロールについてである。

(42) a. They expected [PRO to give damaging testimony].

b. \*They expected [damaging testimony to be given].

c. \*They expected [the boat to sink]. (a-c: Chomsky (1986: 118))

(42a) には、動作主を表す空範疇 PRO が統語的に存在し、they によってコントロールされている。しかし、このようなコントロール関係は(42b)の受動文にはない。これは、受動文の含意された動作主は主節主語の they によってコントロールされない、ということを示している。また、(42c) の非対格動詞文にはそもそも動作主が統語的にも意味的にも存在しないので、they によるコントロール関係は成立しない。これらのことを念頭に入れて、次のような中間構文を考えてみよう。

(42) d. Mary expects [the Latin text she was assigned to translate easily].

(Stroik (1992: 133))

(39) が正しければ、(42d) は受動文の(42b)と同様に非文法的であると予測される。しかし、この文は文法的である。したがって、(42d) の「翻訳する」行為に含意された動作主が Mary によってコントロールされていることになる。

第4のテストは、目的を表わす to 不定詞節の共起可能性についてである。

(43) a. It is time [PRO<sub>1</sub> to sink the boat [PRO<sub>2</sub> to collect the insurance]].

b. The boat was sunk [PRO to collect the insurance].

c. \*The boat sank [PRO to collect the insurance]. (a-c: Chomsky (1986: 118))

この種の to 不定詞節が生じるのは、(43a,b) のように他動詞文と受動文である。これは、統語的に存在する動作主あるいは含意された動作主があれば、目的を表す to 不定詞節は共起できることを意味する。(43c) のような非対格動詞文には、どちらの動作主も存在しない。したがって、非対格動詞文にこの種の to 不定詞節が共起しないのは当然である。ここで中間構文を考えてみよう。

(43) d. \*This book sells quickly [PRO to make much money].

(43d)の非文法性は、中間構文には目的を表す to 不定詞節が共起しないことを示す。ここでも予測に反する。すなわち、(39)では中間構文は受動文と同じ結果になると予測したが、この2つの文の結果は異なっている。

第5のテストは、これらの文に相互代名詞や再帰代名詞が生じるかどうかについてである。

(44) a. They decided [PRO to hit each other].

b. \*Damaging testimony is sometimes given about each other.

c. \*The boat sank for each other. (a-c: Chomsky (1986: 118))

相互代名詞 each other はそれを指す先行詞がその文に存在することを要求する。たとえば、They criticized each other. では、each other を指す表現として主語の they がある。したがって、この文は文法的になる。これは oneself などの再帰代名詞でも同様である。これを念頭に入れて(44)を考えてみよう。(44a)では統語的に存在する動作主 PRO(これは主節主語の they を指す)が each other の先行詞になり、文法的となっている。これに対して、(44b)は非文法的である。これは、含意された動作主は each other の先行詞にはなれないことを示す。(44c)には、動作主が統語的にも意味的にも存在しないので、each other の先行詞が存在せずこの文は非文法的となっている。ここで次のような中間構文を考えてみよう。

(44) d. Books about oneself never read poorly. (Stroik (1992: 135))

(44d)の再帰代名詞 oneself は相互代名詞と同様に先行詞を要求する。中間構文には、受動文と同様に動作主は構造的に存在しない。したがって、(39)によれば、(44d)は(44b)と同様に非文法的であると予測される。しかし、予測に反して(44d)は文法的である。

第6のテストは、ある種の付加部との共起可能性に関している。

(45) a. It is impossible [PRO to file the articles [without PRO reading them]].

b. \*It is impossible [for the articles to be filed [without PRO reading them]].

c. \*The boat sank [without PRO seeing it]. (a-c: Chomsky (1986: 120))

(45a-c)の without PRO doing ~ (あるいは(45d)の after PRO doing ~) という表現は、統語的に明示的な動作主を要求する表現である。すなわち、このような表現に含まれる PRO は統語的に存在する動作主によってコントロールされなければならない。これを踏まえて(45a-c)を考えると、統語的な関連する動作主を有しているのは(45a)のみである。したがって、(45a)だけが文法的になる。なぜなら、(45b, c)には統語的な動作主が存在しないからである。ここで中間構文を考えてみよう。

(45) d. Potatoes usually peel easily [after PRO boiling them]. (Stroik (1992: 134))

(45d)は文法的である。(38d)で指摘したように、中間構文には動作主が意味的に含意されるが、統語的には存在しない。しかし、(45d)は文法的である。これも(39)の予測に反している。

最後のテストは、二次述語表現に関している。

- (46) a. They expected [PRO to leave the room [PRO angry]].  
 b. \*The room was left [PRO angry].  
 c. \*The boat sank [PRO angry].

(a-c: Chomsky (1986: 121))

上記の例から分かるように、二次述語表現が生起できるのは他動詞文の (46a) だけであり、受動文の (46b) や非対格動詞文の (46c) は非文法的である。これは、二次述語の angry の主語である PRO は他動詞文のように統語的に存在する動作主によってコントロールされなければならないことを示唆している。ここで、中間構文ではどうなるか見てみよう。

- (46) d. This children's book reads easily [PRO unaided].

すでに述べたように、中間構文には動作主は統語的に存在しないが、意味的には含意される。したがって、(46d) は非文法的だと予測される。しかしながら、この文は文法的である。

以上をまとめると、(47) のようになる。

(47)

	他動詞文	受動文	非対格動詞文	中間構文
by 句の生起可能性 (40)	×	○	×	×
voluntarily の生起可能性 (41)	○	○	×	×
主節主語からのコントロール可能性 (42)	○	×	×	○
目的を表す to 不定詞節の共起可能性 (43)	○	○	×	×
照応表現の共起可能性 (44)	○	×	×	○
付加部の共起可能性 (45)	○	×	×	○
二次述語表現の共起可能性 (46)	○	×	×	○

☞○と×はそれぞれ当該の文が文法的であることと、非文法的であることを示す。

(39) において、中間構文と受動文は統語テストにおいて同じ結果になるだろうと予測した。しかし、その予測は正しくない。なぜなら、(47) をみると、中間構文と受動文は、7つのテストにおいて何一つ同じ結果にならないからである。むしろ、中間構文は、voluntarily の生起可能性 (41) や目的を表す to 不定詞節の生起可能性 (43) を別にすると、他動詞文と同じ結果になっている。

もし voluntarily の生起可能性 (41) や目的を表す to 不定詞節の生起可能性 (43) に関する中間構文と他動詞文の違いが別の独立した理由で生じているならば、中間構文の動作主は他動詞文と同様に統語的にも意味的にも明示的に存在することになる。そこで、次節でこの点を少し詳しく考えることにする。

## 5.2 中間構文の動作主と出来事について

まず、(47)における他動詞文と中間構文の違いを確認してみよう。この違いに関する例を再度あげると、(48), (49)の通りである。

- (48) a. I decided [PRO to leave voluntarily]. (=41a)  
 b. \*This book sells well voluntarily. (=41d)
- (49) a. It is time [PRO<sub>1</sub> to sink the boat [PRO<sub>2</sub> to collect the insurance]]. (=43a)  
 b. \*This book sells quickly [PRO to make much money]. (=43d)

ここで注目すべきことは、Stroik (1992)も指摘しているように、voluntarilyや目的を表すto不定詞節が共起するには、その文が出来事を表し、かつ、その文に動作主が存在する必要がある。それを示す証拠が3つある。第1の証拠は非対格動詞文に関係している。非対格動詞文は出来事を表すが、動作主を含まない。したがって、非対格動詞文にはこれらの要素が生じないことが予測される。(50)はその予測が正しいことを示している。

- (50) a. \*The boat sank voluntarily.  
 b. \*The boat sank [PRO to make the money].

(Roberts (1987: 190-191))

第2の証拠は状態動詞と関係している。状態動詞を伴う文は出来事を表さないし、主語は動作主ではない。したがって、状態動詞を伴う文にもこれらの要素が生じないと予測される。その予測は正しい。何故なら、(51)のような状態動詞を伴う文は非文法的であるからである。

- (51) a. \*John knew the answer voluntarily.  
 b. \*John knew the answer [PRO to impress everyone].

そして、第3の証拠は受動文に関係している。受動文には含意された動作主が存在する。また、この文は過去時制であれば出来事を表わすことができる。したがって、この種の受動文にはこれらの要素が生じることができると予測される。その予測は正しい。何故なら、(52)のような受動文は文法的だからである。

- (52) a. The book was sold voluntarily.  
 b. The book was sold [PRO to make the money].

ここで中間構文を考えてみよう。中間構文は、4節で述べたように動作主を含意する。しかし、この文は現在時制では一般的に総称文として用いられ、出来事を表すことができない。しかしながら、3節の注3で指摘したように、場合によっては出来事を表すことができる。実際、British National Corpus (BNC)には、(53)のようにcarefully, slowlyなどの副詞を伴う文や、(54)のように目的を表すto不定詞節を伴う文が観察される。これらの中間構文には動作主が含意され、加えてこれらの文は出来事を表している。

- (53) a. JOCASTA FORBES WATCHED the headlights of her mother's car as it drove carefully up the twisting canyon drive, and began to die inside. (BNC)
- b. He turned away to supervise his two assistants, who manhandled the small bundle on to the back of a covered ox-cart. As it drove slowly away towards the town, so the small knot of idlers and gawpers dispersed, back to the quays and the eating houses to tell about what they'd seen, and Huy and Merymose were left alone. (BNC)
- (54) a. The young man began to show his expertise with the long whip. He made it whistle and crack threateningly, only to wind harmlessly around a girl's thigh or waist. It cut through the air to snatch a coloured handkerchief held at arm's length by a smiling showgirl. (BNC)
- b. And there it is, Springfield Park, a 9-hole course, with rolling fairways alongside a local hospital that sold off its recreation acres to gain cash for developing facilities indoors. (BNC)

(53) は (48b) に対応し、(54) は (49b) に対応している。(48b), (49b) が非文法的なのは、その文には動作主が含意されているものの、時制が現在であり、その文が出来事を表していないからである。これに対して、(53), (54) は過去時制で出来事を表しているのだから、文法的となっている。したがって、(47) における他動詞文と中間構文の違い、特に、voluntarily などの動作主指向の副詞と目的を表す to 不定詞節の共起可能性に関する違いは、これらの要素が動作主を明示的にも含意的にも存在し、出来事を表す文にしか生じないことに原因がある。言い換えると、(47) のうち (41) と (43) は別の理由で異なった結果となっているということになる。

これに基づいて、次のような仮定をすることができるだろう。

- (55) 中間構文には、他動詞を伴う不定詞節と同様に、空範疇の動作主が統語的にも意味的にも存在する。

### 5.3 中間構文の構造

本節では中間構文の構造を考える。5.2 節では、中間構文には動作主が統語的にも意味的にも存在すると仮定した。では、(56) のような中間構文の動作主は構造上どのような位置を占めるのだろうか。

- (56) This car handles smoothly. (=17a)

ここで参考になるのは、Baker (1988) の Uniformity of Theta-Assignment Hypothesis (UTAH) である。

## (57) UTAH

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-Structure.

(Baker (1988: 46))

UTAH によれば、例えば、The book was written by John. という受動文の動作主は、John wrote the book. という能動文の動作主と同じ構造的な位置を占めることになる。

この UTAH は Principles and Parameters の枠組みで提案されているものである。本論で採用するミニマリスト・プログラムでは、UTAH という独立した仮説は存在しない。しかし、ミニマリスト・プログラムでは、UTAH の効果は意味役割を統語的位置に関連させることによって引き出すことができる。一般に、動詞 handle を伴う他動詞文 (58) の主語は (59a) のように軽動詞 *v* の指定部にあり、それに動作主が付与されると仮定されている。したがって、同じ handle という動詞を伴う中間構文 (56) の主語も (59b) のように軽動詞の指定部に存在し、それに動作主が付与されると考えられる。ただし、この主語は発音されないので、本論では空範疇の ec (empty category) と表示することにする。

(58) One can handle this car smoothly.

(59) a. [<sub>VP</sub> one [<sub>v</sub> V [<sub>VP</sub> handle this car]]]

b. [<sub>VP</sub> ec [<sub>v</sub> V [<sub>VP</sub> handle this car]]]

(59a,b) の軽動詞はそれぞれ one, ec に動作主という意味役割を付与する。しかし、この軽動詞は対格の値の付与の仕方に違いがある。(59a) の handle は他動詞であるので、軽動詞は this car に対格の値を付与する。一方、(59b) の handle は自動詞であるので、this car に対格の値を付与しない。以上をまとめると次のようになる。

(60) a. 他動詞の軽動詞 *v* は *v*P 指定部にある外項に意味役割を付与し、V の内項に格の値を付与する。

b. 中間動詞の軽動詞 *v* は *v*P 指定部にある外項に意味役割を付与するが、V の内項に格の値を付与しない。

(60b) により、中間構文では、V の内項の DP は格の値が付与されないために、この内項は TP の指定部に併合され、格の値が付与されなければならない。

さらに、中間構文には 4 節で述べたように一般的には副詞を伴う必要があり、それがなければ非文法的なる。

(61) a. The wall paints easily. (=29b)

b. \*The wall paints. (=30b)

したがって、副詞は義務的な要素であり、動詞の補部の位置に生じると考えられる。

以上のことを踏まえて、Chomsky (2015) の併合操作を用いて (62)(=56) の中間構文の *v*P の

派生を考えると、次のようになる。

(62) This car handles smoothly.

- a. handle → smoothly を併合する。
- b. [handle smoothly] → this car を併合する。<sup>7)</sup>
- c. [this car [handle smoothly]] → 軽動詞 *v* を併合する。
- d. [*v* [the car [handle smoothly]]] → 外項 *ec* を併合する。
- f. [*ec* [*v* [this car [handle smoothly]]]]<sup>8)</sup>

次に、中間構文には形態的に Middle Voice があることをみよう。周知のように、Collins (2005) では、受動文に Voice P がある仮定されている。さらに、その主要部が *by* であると主張されている。例えば、(63a) の受動文の *be* 動詞以降の構造は (63b) のようになる。

(63) a. The book was written by John.

- b. [<sub>VP</sub> *be* [<sub>VoiceP</sub> [<sub>Voice'</sub> *by* [<sub>VP</sub> John [<sub>V</sub> *v* [<sub>PartP</sub> [<sub>Part'</sub> Part [<sub>VP</sub> write the book]]]]]]]]]]

(Collins (2005: 9))

その後、(63b) に T が併合され、さらに Part P の Voice P への併合、John の TP への併合が適用されて (63a) が派生される。

ここで、次のようなギリシア語の例を考えてみよう。

(64) To pukamiso sideronete efkola

the shirt iron-**Nact** easily

'The shirt irons easily.' (Nact: non-active)

(Alexiadou and Doron (2007: 26))

ギリシア語では、(64) のように中間動詞が形態的に語尾変化をする。また、ヘブライ語でも同様に、(65) のように中間動詞が形態的に語尾変化をする。

(65) ha-xulca lo hitgahaca l-o

the shirt not iron-**Mid** for-him

'The shirt didn't iron for him.' (Mid: Middle)

(Alexiadou and Doron (2007: 26))

英語にはそのような語尾変化はないけれども、普遍文法においてはすべての言語にそのような Middle Voice があると仮定してみよう。

これが正しいとするなら、(62f) に Middle が併合されることになる。その後、T を併合する。英語では、時制文の主語は必ず音声形式をもつものでなければならない。したがって、TP には *ec* ではなく this car が併合される。その後、C を併合し、C の素性が T に継承される。それによって、this car の併合した要素は  $\langle \phi, \phi \rangle$  というラベルが与えられることになる。以上の操作は (66) のようになる。なお、handle が軽動詞 *v* から Middle へと移動する。その結果、



ギリシア語やヘブライ語では、(64), (65) のような語尾変化をすることになる。

- (66) a. [ec [v [this car [handle smoothly]]]] → Middle を併合する。  
 b. [Middle [ec [v [this car [handle smoothly]]]]] → T を併合する。  
 c. [T [Middle [ec [v [this car [handle smoothly]]]]]] → this car を T に併合。  
 d. [this car [T [Middle [ec [v [t [handle smoothly]]]]]]] → C を併合する。  
 e. [C [this car [T [Middle [ec [v [t [handle smoothly]]]]]]]] → C の素性を T に継承する。  
 その結果、素性共有により、ラベル  $\langle \phi, \phi \rangle$  がつく。  
 f. [C [ $\langle \phi, \phi \rangle$  this car [T [Middle [ec [v [t [handle smoothly]]]]]]]]

このような派生構造が正しければ、どのような結果が得られるだろうか。たとえば、(67) のような例を考えてみよう。

- (67) a. Letters to oneself compose quickly.  
 b. Books about oneself never read poorly.

(Stroik (1992: 135))

(67) には、oneself という再帰代名詞がある。再帰代名詞はすでに説明したように、その文には先行詞がなければならない。これを念頭に入れて (67) を考えると、(67) の letters to oneself, books about oneself は (66a) の this car の位置にある。加えて、(66a) にはその先行詞と機能する ec が存在する。したがって、oneself はその ec によって束縛されることになり、その結果、(67) は文法的になる。このように本節で提案した中間構文の構造は、(67) のような例を適切に説明することができる。

## 6. 結び

本論文では、まず、動詞の種類を概観したのち、中間構文の意味的な特徴と統語的な特徴を明らかにした。次に、中間構文の動作主の特性を検証するために、7つの統語テストを見てみた。その結果、中間構文の動作主の振舞いは受動文よりも、むしろ、他動詞文の動作主と同じである、という結論に達した。そこで、中間構文の構造には、他動詞文と同じように、軽動詞の指定部に動作主が存在すると仮定した。さらに、ギリシア語やヘブライ語などでは中間動詞のマーカーがあるに注目し、Middle Voice を仮定し、Chomsky (2015) の枠組みで中間構文の構造を提案した。

## 注

- 1) 他動詞でも受動態ができないものがある。例えば、測定関係を表す動詞 (cost (値段がする)、last (続く)、measure (数量がある)、weigh (重さがある) など)、対称関係を表す動詞 (resemble、touch (接する)、marry、meet (出会う) など) や容器・中身関係を表す動詞 (have (もっている)、contain (含んでいる)、lack (欠いている)、sleep (泊められる) など) である。
  - i) a. His speech lasted two hours.  
b. \*Two hours were lasted by his speech.
  - ii) a. Bill resembles Tom.  
b. \*Tom is resembled by Bill.
  - iii) a. This text has many pictures.  
b. \*Many pictures are had by this text.
- 2) 中間構文を議論する場合、一般的に、非対格動詞の代わりに能格動詞 (ergative verb) という用語が用いられるが、本論では非対格動詞という用語を用いる。
- 3) 中間構文は総称文として用いられ、特定の出来事を表わすのには用いられない、と主張されている。しかし、この主張には(i), (ii)のように反例が指摘されている。(i)は過去に行われた行為 (出来事) を表し、(ii)は将来行われると予想される行為を表している。これについては、5 節で再度議論する。
  - i) a. The steaks you bought yesterday cut like butter.  
b. The paint we were persuaded to buy sprayed on evenly.  

(Fellbaum (1986: 4))
  - ii) a. Your new oven will clean in minutes!  
b. Your kitchen counters will wipe clean in a jiffy!  

(Fellbaum (1986: 5))
- 4) 本論文では、非対格動詞の主語はもともと目的語の位置にあるという非対格仮説を採用する。
  - i) \_\_\_ sank the ship  
この構造からThe ship sank.という文が派生されるには、the shipが主語の位置に移動しなければならない。
- 5) 中間構文には副詞が必要であると言われる。しかし、4 節で述べるように、否定辞等があれば副詞は必要ではない。
- 6) しかし、これには反例が観察されている。
  - (i) a. Her latest novel is selling like hotcakes.  
b. The truck is handling smoothly.  

(Fellbaum (1986: 4))
- 7) Chomsky(2015)では、handleはラベル付けに関して弱いと仮定されている。したがって、easilyと併合

した場合、ラベルは付かないと考えられる。なお、本論では、Chomsky (2007)に従い、ラベルは更なる操作を受けない要素にはラベルは必要ない、という仮定を採用する。

8) Chomsky (2015)では、空範疇の痕跡はラベル付けには見えないと仮定している。ここでは、同じ空範疇のecもラベル付けには見えないとする。したがって、ecの併合後のラベルはvPとなる。

## References

- Alexiadou, Artemis and Edit Doron (2007) "The Syntactic Construction of Two Non-active Voices: Passive and Middle," presented in Workshop on Global Selective Comparison, *GLOW XXX, Tromsø*.
- Baker, Mark (1988) *Incorporation*, Chicago University Press, Chicago.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from below," *Interfaces + Recursion = Languages? Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by U. Sauerland and H.-M. Gartner, 1-30, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.
- Chomsky, Noam (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structure, Strategies and Beyond: Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3-16, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to the Passive in English," *Syntax* 8.2, 81-120.
- Fagan, Sarah (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fellbaum, Christiane (1985) "Adverbs in Agentless Actives and Passives," *Chicago Linguistic Society* 21, 21-31.
- Fellbaum, Christiane (1986) "On the Middle Construction in English," reproduced by the Indiana University Linguistics Club, Bloomington, Indiana.
- Fiengo, Robert (1980) *Surface Structure: The Interface of Autonomous Components*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Hale, Ken and Jay Samuel Keyser (1987) "A View from the Middle," *Lexicon Project Working Papers* 10, MIT.
- Hoekstra, Teun and Ian Roberts (1993) "Middle Constructions in Dutch and English," *Knowledge and Language II: Lexical and Conceptual Structure*, ed. by Eric Reuland and Werner Abraham, 183-220, Kluwer Academic Publishers, Netherland.
- Jespersen, Otto (1927) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part III, George Allen & Unwin, London.

- Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Oba, Yukio (1998) *Eigo no Koubun Kenkyu (Studies on English Constructions)*, Eihosha, Tokyo.
- Oba, Yukio (2011) *Eigokoubun o Tankyu Suru (Exploration on English Constructions)*, Kaitakusha, Tokyo.
- Reinhart, Tanya (2016) *Concepts, Syntax, and Their Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Roberts, Ian (1987) *The Presentation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris Dordrecht.
- Stroik, Thomas (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
- Stroik, Thomas (1995) "On Middle Formation: A Reply to Zribi-Hertz," *Linguistic Inquiry* 26, 165-171.
- Stroik, Thomas (1996) *Minimalism, Scope, and VP Structure*, SAGE Publications, London.
- Travis, Lisa D. (2012) *Inner Aspects: The Articulation of VP*, Springer, Dordrecht.
- Zwart, Jan-Wouter (1997a) "On the Relevance of Aspect for Middle Formation," ms., University of Groningen.
- Zwart, Jan-Wouter (1997b) "On the Generic Character of Middle Constructions," ms., University of Groningen.
- Zribi-Hertz, Anne (1993) "On Stroik's Analysis of English Middle Constructions," *Linguistic Inquiry* 24, 583-589.
- van Oosten, Jeanne (1977) "Subjects and Agenthood in English," *Chicago Linguistic Society* 13, 459-471.

(おおば・ゆきお 外国語学部教授)